

祖母と私とお米研ぎ

千葉県富津市立大貫中学校

三年

山口

華留

私は赤ちゃんの頃から食いしん坊だ。私が

生まれて数カ月経った日、家族全員で夕食を

食べている時でした。私はいつものようにた

くさん食べました。その姿を見た祖父が

「この子は太食らいだ。」

と笑いが言った時、私がいきなり

「おぐら！」

と叫んだのです。家族が突いの嵐に包まれた

瞬間でした。その時、食べていたのはもちろ

ん大好物のお米でした。

この大好物のお米をいつも研いでいたのは

祖母でした。祖母の研ぐお米は格別で地元の

お米が何十倍とおいしくなるのです。また、

祖母はお米を研ぐ時、家の隣の小屋で研いで

いました。私は時々、祖母と二人で一緒に米

研ぎをしながらたわいもない話をしています。

た。その時間はとても心地いものでした。

ある日、私は祖母にどんな研ぎ方をしたらそ  
 んなにおいしなお米が炊けるのか聞いてみ  
 ました。祖母は特に母にもしていないと言っ  
 ました。でも、私はなんとなく祖母が家族  
 一人一人にお米をおいしく食べてもらいた  
 いという愛情だったので感じました。確か  
 にそれではおもしろいと言えなけれど  
 その日のお米はいつもよりおいしくてもや  
 さいい味がしました。  
 またある時母と大喧嘩をしました。ま  
 かりは本当に些細なことでした。すぐに謝れ  
 ばいいものをつい意地になっ  
 てしま、その  
 まま一日が過ぎてしま、その日は夕  
 飯は食べませんでした。次の日も仲直りで  
 きず、夕飯を家族全員で食べたものの雰囲気  
 気が悪くお米もその他の料理を味がおい  
 ように感じました。こ  
 こまで楽しくない食事は初  
 めででした。また次の日、そ  
 ろそろ精神  
 的に苦しくなりました。た  
 がつまらない意地と謝  
 り方  
 がれ  
 け  
 り  
 好  
 く  
 好  
 っ  
 た  
 私  
 は  
 家  
 に  
 い  
 る  
 の  
 が  
 っ  
 ら  
 く

日りのあの小屋に逃げ込みました。小屋にはい  
つもこの時間にはいない祖母の姿がありましたし  
た。祖母は入って来た私に声をかけずただひ  
たすらにお米を研いでいました。シヤカシヤ  
カシヤカシヤカ、お米を研ぐ音はいつもと違  
い少し弱く柔かい音に聞こえました。その音  
を聞くと心が少しずつ安らいやくやうな  
気がしました。祖母はお米を研ぎ終えると、  
私に向かって微笑んで  
「おみんねでござ飯食べるべし。」  
と言いました。ただそれだけの言葉だったの  
に私の中で我慢してきたなにかが切れました。  
大粒の涙が目から溢れ出てきました。私はす  
ぐら小屋を飛び出し母に謝りにいきました。そ  
して快く仲直りできました。その後すぐに家  
族みんなでご飯を食べました。家全体が笑顔  
に包まれその時のご飯は幸せの味でした。  
数年後、今現在祖母は心臓の病にかかり入  
院しています。もう祖母が研いだお米を食べ  
られたいのはとても寂しいです。それでも、

祖母から持ったものはたくさんあってその一つがが今の私の糧となっています。お米を食べ  
て私はお米を毎日研いでいます。お米を食べ  
る一人一人が幸せで満たされるように、愛情  
を込めて。私の研いだお米をおいしそうに食  
べるのを見ると「ああ、作った甲斐があった  
な」としみじみ感じます。祖母はこんな気持ち  
でいつもお米を研いでいたのだねとこの頃  
気づきました。お米は作る人も食べる人も双  
方を幸せにしてくれます。家族の論を広げて

くれます。そんなお米だからこそこれから先  
もずっと大切にしていきたいと思えます。